

### 3. 自然・社会的条件の整理

#### (1) 自然的条件

##### 地勢概要

富田林市は大阪府の東南部に位置し、大阪都心部から約20kmの距離に位置します。

市域の広がり、東西約6.4km、南北約10.1km、総面積は39.66 k m<sup>2</sup>です。

地勢的には、市域のほぼ中央を流れる石川によって形成された平野部と、金剛山系に連なる南部の山地、羽曳野丘陵の一部である西部の丘陵地によって構成されています。

##### 気象

富田林市は大阪府にあって、気候的には瀬戸内式気候の山麓地帯に区分されます。

平成10(1998)年～平成12(2000)年の3ヵ年の年間降水量は、概ね1,000～1,300mm程度で、年平均気温は16 前後です。

(平成10～12年の平均値)

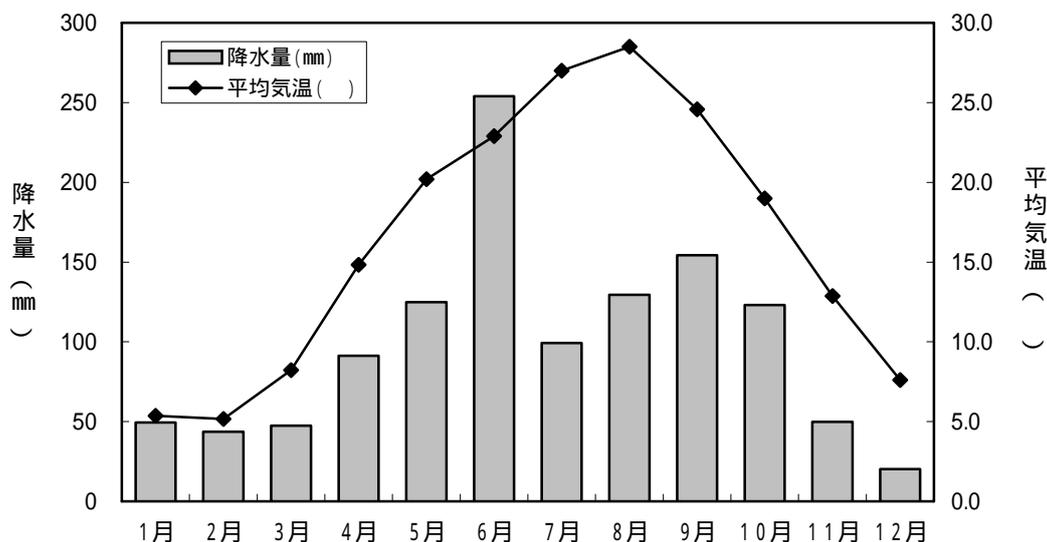


図3-1 月別降水量と平均気温

##### 地質

市域の地質は、大きくは南部の山地帯を構成する花崗岩、二上層群、古大阪層群、大阪層群と、西部の丘陵部にみられる満池谷累層、石川沿いの低地を構成する中低位段丘層、沖積層よりなります。

表層地質でみると、西部の丘陵部はほとんどが造成による人工地盤となっています。

## 植生

富田林市の潜在自然植生は、ヤブツバキクラス域に属する常緑広葉樹林と考えられますが、現存するものはほとんどが人手の加わった二次林（コナラ、アカマツ、スダジイ等）で、西部・南部の丘陵地にはこの種の自然植生が広く分布しています。

また、とくに貴重な樹木・樹林については、特定植物群落として環境省の『第3回自然環境保全基礎調査』（昭和63年）に春日神社のシリブカガシ林、『第5回自然環境保全基礎調査』（平成12年）に美具久留御魂神社のシイ林があげられています。また、美具久留御魂神社のシイ林は、大阪府自然環境保全地域にも指定されています。

そのほか、市が指定する保存樹木・樹林は下表の通りです。

表3-1 市指定保存樹木

番号	場所	樹種	幹周(m)	樹高(m)
1	龍泉寺	モッコク	2.5	13
2	龍泉寺	スギ	3.7	25
3	楠妣庵観音寺	クスノキ	3.9	30
4	楠妣庵観音寺	クスノキ	1.2	20
5	楠妣庵観音寺	イチョウ	2.2	27
6	楠妣庵観音寺	ケヤキ	2.4	30
7	西方寺	イチョウ	3.6	26
8	明尊寺	イブキ	2.6	9
9	月光寺	イブキ	2.4	9
10	光盛寺	イブキ	3.6	10
11	圓光寺	イチョウ	2.9	10
12	慈眼寺	クスノキ	3.4	12
13	東條小学校	センダン	2.8	7
14	内田邸	ヤマモモ	2.5	10

表3-2 市指定保存樹林

番号	名称	樹林面積(m <sup>2</sup> )	代表的樹種
1	美具久留御魂神社	22,000	コジイ、アラカシ、ナナメノキ、サカキ、クスノキ
2	錦織神社	10,000	コジイ、スギ、ヒノキ、クスノキ
3	春日神社	11,700	シリブカガシ、アラカシ、ヒノキ、コジイ
4	瀧谷不動明王寺	13,500	アラカシ、ヒノキ、モミ、スギ、アカマツ
5	佐備神社	4,600	サカキ、クスノキ

## (2) 社会的条件

### 発展の経緯

富田林は、先史時代より人々の暮らしが営まれ、弥生時代には二上山周辺に産出するサヌカイトを利用した石器が喜志や中野において大量に生産され、交易を通じて近畿地方に広く流通していたものと思われます。また、石川を望む丘陵上には石川流域に繁栄したであろう氏族の首長たちの古墳が多く造営されています。

大陸から伝えられた仏教文化はこの富田林にも花開き、飛鳥時代には、新堂廃寺等の寺院が建立され、また織物等の新しい文化を伝えてきた人々が、富田林の地に暮らしていたであろうことが推測されています。

平安時代には、今も秋祭り等でにぎわう美具久留御魂神社や佐備神社があり、室町時代には、錦織神社も創建されています。

南北朝時代においては毛人谷や龍泉に楠木正成の山城が築かれ、足利軍を迎え撃ちました。

戦国時代においても、山中田等に山城が築かれ、群雄割拠の後、治世が落ち着き始めた16世紀の中頃の永禄年間に、京都興正寺門跡第16世証秀上人が「富田の芝」と呼ばれていた荒地を買い受け、寺と町衆の協力によって寺内町が造営されました。

浄土真宗の御坊を中心に形成された寺内町「富田林」は、江戸時代には周辺地域の商品・産品流通の中核地として発展し、明治時代には郡役場や税務署、旧制中学校、高等女学校等の施設が整備され、南河内地域の中心地として発展してきました。

昭和25(1950)年の市制施行の後、高度成長期には、大阪市近郊の住宅地として西部地域の丘陵上で大規模な住宅開発が進み人口が急増し、これにあわせて都市基盤整備も進展しました。

近年は、施設や基盤の整備も一段落し、人口増加も落ち着き、良好な自然環境を有する郊外都市として成熟しつつあります。

このように富田林は、歴史的経緯のなかで、古の時代においては、大陸の新しい文化を積極的に受け入れ、中世以降の封建的な時代においても、一定の自治権を有し、寺内町を中心に独自のまちづくりを進め、近世には、大阪府内でも有数の集積を誇る南河内地域の中核を担ってきたまちです。また近代においても、石川や、田園地帯に広がる農地、山林等、自然の恩恵を受け、身近な緑を整備し、自然環境と人々の暮らしが共存してきました。

## 社会的条件

### 1) 人口

富田林市の人口は、昭和25(1950)年の市政施行時は約3万人でしたが、大阪都市圏のベッドタウンとしての性格が強くなった1960年代後半から急激に増加し、人口は増加し続けました。しかし、平成17(2005)年には、日本全体でも人口が減少したように、富田林市においても人口が減少に転じています。

なお、平成18(2006)年9月末現在の人口は123,992人です。このうち、65歳以上人口が全体の18.3%を占め、増加傾向にあります。

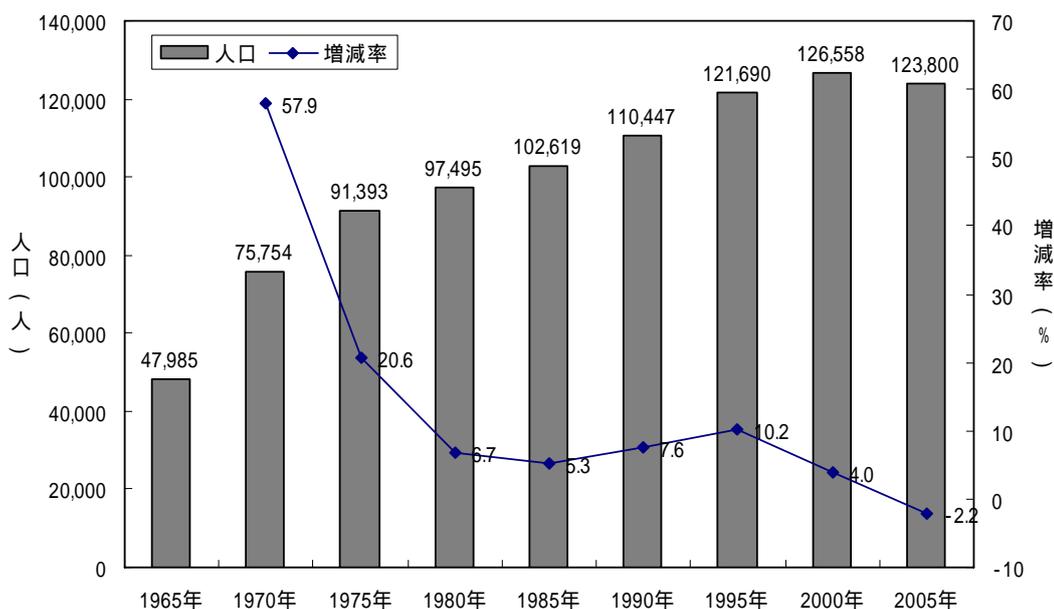


図3-2 人口と増減率(各年次国勢調査による人口と増減率)

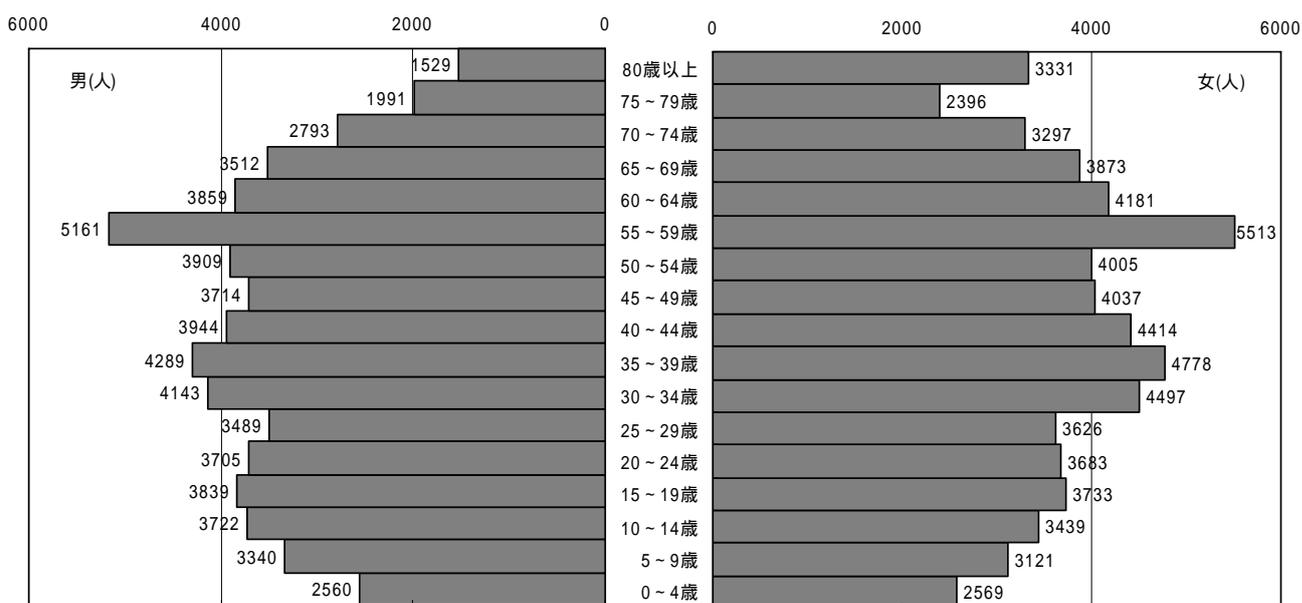


図3-3 年齢階層別人口(平成18(2006)年9月 住民基本台帳)

## 土地利用

富田林市の土地利用の現況及び変遷は、下表のとおりです。

平成8(1996)年における富田林市の緑の土地利用は、市域面積の58.2%にあたる2313.2haとなっています。緑の土地利用のうち、39.3%を山林が占め、田・畑をあわせた農地が42.2%、公園・緑地が10.1%を占めています。

昭和49(1974)年と平成8(1996)年の土地利用を比較すると、面積的にもっとも減少しているのは山林・荒地等で、市域全体に占める割合も31.7%から22.9%にまで減少しています。そのほか、田や畑、河川・湖沼等(ため池を含む)等緑の土地利用は軒並み減少しています。逆に増加しているのは住宅地や商業・業務用地、工業用地等であり、この間に都市的な土地利用が急速に広がったことがうかがえます。

表3-3 土地利用面積の変遷

		昭和49(1974)年	平成8(1996)年	増減
		割合(%)	割合(%)	割合(%)
緑の土地利用	公園・緑地等	1.7	5.9	4.2
	田	18.1	14.3	-3.9
	畑	12.1	10.3	-1.8
	山林・荒地等	31.7	22.9	-8.9
	河川・湖沼等	5.8	4.9	-0.9
	小計	<b>69.5</b>	<b>58.2</b>	<b>-11.3</b>
その他の土地利用	一般低層住宅地	9.8	13.3	3.5
	密集低層住宅地	0.5	0.5	0.1
	中高層住宅地	1.4	2.4	1.0
	商業・業務用地	1.8	3.0	1.2
	工業用地	1.1	2.3	1.2
	道路用地	6.3	9.3	3.0
	公共公益施設用地	2.6	4.3	1.7
	造成中地	2.6	0.9	-1.7
	空き地	4.0	5.3	1.3
	その他	0.0	0.0	0.0
	対象地域外	0.5	0.5	0.0
<b>合計</b>		<b>100.0</b>	<b>100.0</b>	<b>0.0</b>

：「割合」は市域面積に対する割合  
資料：土地利用分類図(国土交通省国土地理院)

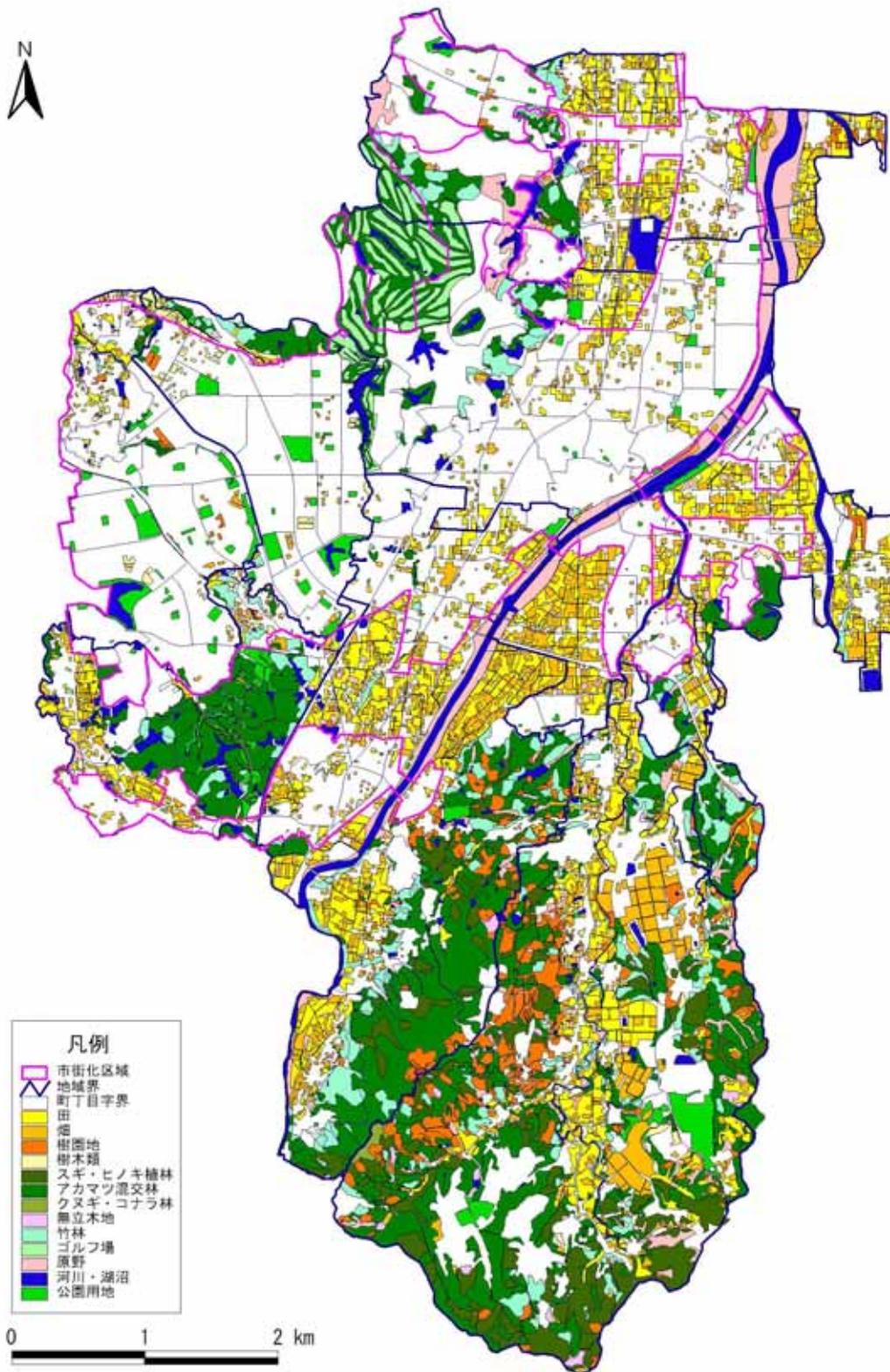


図3-4 土地利用現況図

## 文化財

富田林市は富田林寺内町に代表されるように、南河内の中心地として古くから発展してきました。市内には国・府指定の史跡・天然記念物・文化財・名勝・遺跡等が残されています。また、市域を南北に東高野街道が縦断しており、古くから交通の要衝であったこともうかがえます。市内に現存する国・府指定の文化財は次頁図3-6のとおりです。

また市の中心部に位置する富田林寺内町は、国指定重要文化財の旧杉山家住宅をはじめとして、往事の隆盛を偲ばせる美しいまちなみが保存されています。このため、市では旧寺内町のうち約11haを都市計画法にもとづく伝統的建造物群保存地区に指定しており、また、平成9(1997)年には国の文化遺産として重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

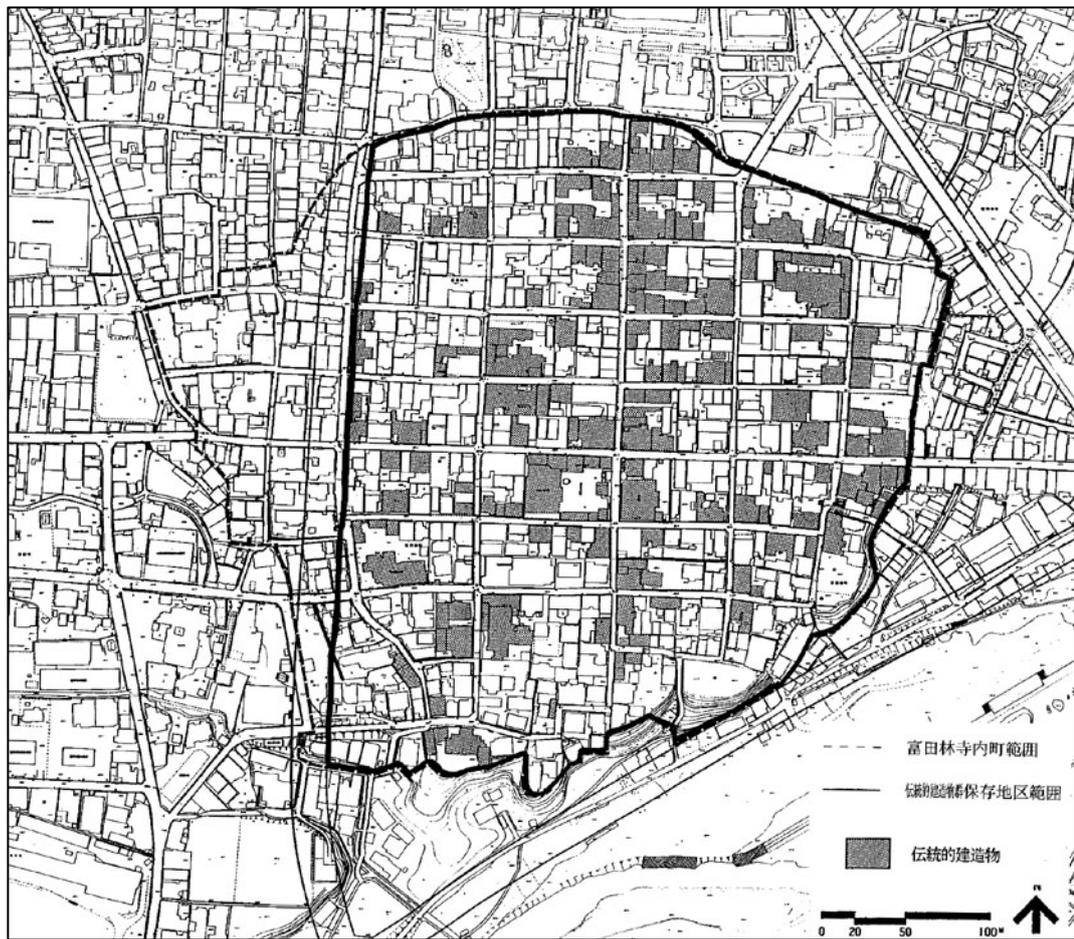


図3-5 寺内町のまちなみ

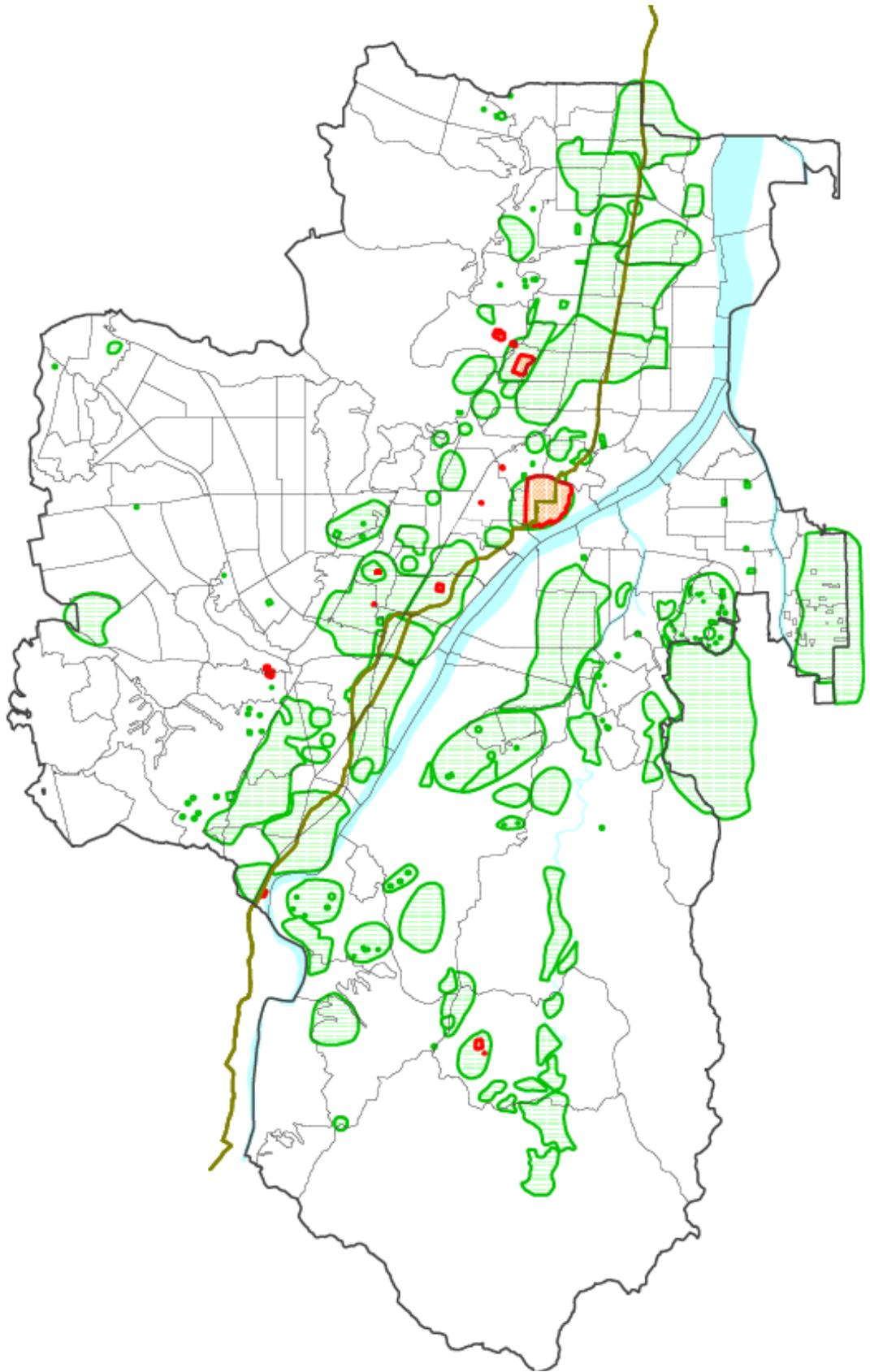


図3-6 富田林の文化財分布地図